

結核

第七卷 第一號

昭和四年一月二十四日發行

綜説

本邦農村ニ於ケル結核ノ疫理學的考察

(第六回日本結核病學會總會特別講演)

內務技師 醫學博士 佐藤 正

目次

- 一、序言
- 二、都鄙ニ於ケル結核死亡比較
- 三、農村ニ於ケル結核調査

序言

本邦ニ於ケル結核死亡ハ之レヲ帝國死因統計ニ索ムレバ、最近ニ於テ多少減少ノ傾向ハアルガ、結核病蔓延ノ實際ハ寧ロ年々増加ノ情勢ニアルデアラウ。尠クトモ歐米各國ニ於テ觀察セラル、ガ如キ明白ナル死亡者減少ヲ觀ルコトヲ得ナイ。從來、我國ニ於テハ結核ハ主トシテ都市ノ疾病トシテ注目セラレ、疫學上ノ研究モ豫防上ノ諸施設モ殆ド都市ヲ對象トセラレタモノ、ミデ、地方町村若シクハ農村ニ對スル結核豫防及ビ診療ニ對スル施設ハ殆ド顧ミラレナイト云ツテモ過言デナイ。

然ルニ我國ニ於ケル村ノ總數ハ大正十四年十月一日ノ國勢調査ニ據レバ一〇、三八六村ニシテ其人口ハ三三、九八三、六

六二人デアツテ、我國總人口ノ五割七分ヲ占メテキル。故ニ地方村落ニ於ケル本病蔓延ノ對策ハ、我國ニ於ケル結核問題ニ關シテ重要ナル意義ヲ有スルモノデナケレバナラス。近時識者ガ地方農村ノ衛生ヲ論ジ、更ニソノ結核問題ニ留意スルノ傾向ノアルノハ喜ブベキ現象デアアル。

斯クノ如キ實狀ニアルカラ今日迄、我國ノ地方農村ニ於ケル結核ノ流行病學的研究或ハ社會衛生的の考察ニ就テハ未ダ之ヲ見ザルノ有様デアツテ、茲ニ是等ノ問題ニツイテ攻究スルノモ強チ徒爾ナラズト信ズルモノデアアル。

斯種ノ考察ヲナスニ不便ト困難ヲ感ズルノハ、農村ニ於ケル結核ノ流行病學的事實及ビ之レガ資料ノ乏シイコトデアツテ、特ニ此ノ目的ノ爲ニ特別ノ實驗及ビ調査ヲナスコトガ必要デアアルガ未ダ實施サレテ居ナイ。從テ余ノ利用シ得ル材料モ既存ノ材料ニ就テデアツテ、主トシテ(一)日本帝國死因統計(二)內務省及地方廳ニヨリテ施行セラレタル全國農村保健衛生調査材料(三)各府縣ニ於ケル出稼職工ノ健康調査(四)各府縣ニ於テ行ハレタル結核患者一齊調査等デアアル。

一 都鄙ニ於ケル結核死亡比較

特ニ我國農村ニ於ケル結核死亡ヲ知ランコトハ、全國農村毎ニ特殊ノ統計的及ビ實地診療調査ヲ行ハザレバ、之ヲ求メルコトガ出來ナイ。斯カル特殊ナル調査ハ非常ナル經費ト勞力トヲ要スルコトデ容易ニ望ミ難イ。

今、死因統計ニヨリテ過去十五年間(自明治四十一年至大正十一年)ニ互リ、全國的ニ都市(人口五萬以上ノ市)ト村邑(人口五萬以上ノ市ヲ除ケル其他ノ市町村)トニ於ケル結核死亡狀況ヲ觀察スレバ、次ノ如キ數字ヲ得ル。

第一表(甲) 都市 村邑 結核死亡者累年比較

年次	人口五萬以上ノ都市		其他ノ市町村	
	肺結核	全結核	肺結核	全結核
明治四十一年	一七,三六七	二二,三二一	五九,二二二	七六,五五〇
同 四十二年	一七,九〇五	二四,一五八	六四,一五八	八九,四六四
同 四十三年	一七,七〇九	二三,七四一	六四,九四二	八九,四六二
同 四十四年	一七,六七〇	二三,八四六	六三,〇九六	八六,八七六

年次	人口十萬以上ノ都市	其他ノ市町村
明治四十五年	一八、三七六	六三、六七二
大正二年	一七、八七八	六二、三五五
同三年	一八、七九四	六一、六二〇
同四年	一九、〇四二	六四、二一一
同五年	二〇、二六五	六六、三六九
同六年	二〇、二三一	六七、七二一
同七年	二三、三七八	七五、八三七
同八年	二三、一〇六	七〇、〇二〇
同九年	二一、四〇八	六五、六九四
同十年	二〇、二二六	六二、六七七
同十一年	二一、〇六二	六四、四五三

第一表(乙) 都市村邑 結核死亡者累年比較

年次	人口十萬以上ノ都市		其他ノ市町村	
	肺結核	全結核	肺結核	全結核
大正十二年	一一、九四一	一九、九五一	六七、六三三	九八、二六五
同十三年	一一、〇七二	一八、六四八	六六、三三八	九五、五八一
同十四年	一五、〇七五	二一、一四七	六六、四七一	九四、八〇九
昭和元年	一六、〇八七	二二、三六九	六四、二四三	九〇、六七六

第一表ニ於テ觀ル如ク、肺結核及ビ全結核死亡ノ實數ニ於テハ村邑ニ於ケル死亡數ハ、都市ニ於ケルソレニ比シテ三乃至四倍ヲ算スル。コハ云フマデモナク地方村邑ハ、都市ニ比シテ地域廣大ニシテ人口モ多數ナルヲ以テ、結核死亡ノ絶對數ハ前者ニ於テ後者ヲ凌グコト遙カニ大ナルガ爲デアル。故ニ結核死亡ノ多寡ヲ知ランニハ第二表ニ示セル如ク人口ニ對スル死亡率ヲ觀察スル必要ガアル。

第二表ニ據レバ、明治四十一年ヨリ昭和元年ニ至ル十九年間ニ於ケル都市ニ於ケル全結核死亡ハ極メテ遅々タル步度ヲ以テ漸次減少ノ傾向ヲ示シ、殊ニ大正十年以來ハ減少ノ狀稍々著明ニ認メ得ル。即チ明治四十一年ヨリ大正九年迄ハ人

口萬ニツキ全結核死亡ハ三五・〇乃至三八・〇内外デアツタガ、大正十一年ニハ低減シテ二一・〇ヲ示スニ至ツタ。(大正十二年以降ハ其數値ニ於テ二四・〇乃至二六・〇内外ヲ上下シ、著シク減少シタノハ、同年以降ノ統計ガ人口十萬以上ノ都市ヲノミ示セルガ故デアル)

次ニ地方村邑ノ全結核死亡ニアツテハ、此間ニ於テ認ムベキ減少ノ傾向ガ示サレナイ。唯、僅ニ大正十一年以降ニ於テ極メテ輕微ナル死亡減少ノ兆ヲ認メ得ナイコトモナイガ、ソノ年次死亡曲線ヲ觀察スレバ殆ド累年同價ヲ保持シテ下降シナイ。即チ明治四十一年ヨリ人口萬ニツキ約二〇・〇内外ノ全結核死亡ハ、大正七・八・九年ノ流行性感冒ノ世界的流行ニヨル影響ヲ度外視シ得ベキ大正十・十一・十二・十三年等ニ於テモ、依然トシテ一九乃至二〇・〇内外ノ全結核死亡ヲ示シ、最近ニ於テ認メ得ル減少ノ傾向モ都市ノソレニ比シテソノ程度極メテ輕微ト云フベキデアル。

以上ノ現象ハ肺結核死亡ニ就テモ全ク同様デアル。累年ノ年次死亡曲線ノ觀察ニヨリテ、大正七八年ニ於ケル流行性感冒ノ流行ガ結核死亡ニ及ボセシ影響ハ都市ニアリテモ村邑ニ於テモ其程度ハ全ク同一デアル。

更ニ第二表ニ據ツテ各年別ニ都市ト村邑トノ全結核死亡對人口比率ヲ比較スレバ、都市ノ率數ハ村邑ノソレヨリ常ニ優越過重ナルヲ知ル、斯カル都市結核死亡ノ超過度ハ明治四十一・四十二年當時ハ一九乃至一八(人口萬ニ付)ソレヨリ大正三・四乃至六・七年迄ハ一五乃至一八デアツタガ、大正八・九年以降ハ一一乃至一四ヲ示スルニ至ツタ。モトヨリ數値ニ於テ異常ナル差異トハ稱シ得ナイガ、コノ減少ノ理由トシテハ、都市ノ結核死亡ハ大正八・九年以降幾分減少度ヲ示セルニ反シテ、村邑ノソレハ其傾向ノ無イコトガ推知セラレチバナラス。

第二表 都市 村邑 結核死亡對比

年 次	人口五萬以上ノ都市		其ノ他ノ市町村		全結核死亡 都市超過	同 上比率
	肺結核	全結核	肺結核	全結核		
明治四十一年	二八・七	三六・九	一三・七	一七・七	一九・二	一〇八・四七
同 四十二年	二八・六	三八・六	一四・八	二〇・五	一八・二	八八・二九
同 四十三年	二七・三	三六・七	一四・八	二〇・四	一六・三	七九・九〇

明治四十四年	二七・八	三七・五	一四・〇	一九・三	一八・二	九四・三〇
同 四十五年	二八・四	三七・九	一三・九	一九・六	一八・三	九三・三七
大正二年	二六・六	三五・五	一三・五	一八・八	一六・七	八八・八三
同 三年	二六・一	三五・一	一三・五	一九・〇	一六・一	八四・七四
同 四年	二五・七	三四・九	一三・七	一九・二	一五・七	八一・七七
同 五年	二六・五	三六・一	一三・九	一九・八	一六・三	八二・三二
同 六年	二五・八	三五・七	一四・一	二〇・一	一五・五	七七・一一
同 七年	二八・〇	三九・一	一六・〇	二二・八	一六・三	七一・四九
同 八年	二五・三	三五・五	一四・九	二一・三	一四・二	六六・六七
同 九年	二四・四	三四・五	一三・九	二〇・一	一四・四	七一・六四
同 十年	二一・八	三一・三	一三・一	一九・一	一二・二	六三・八七
同 十一年	二一・六	三一・二	一三・六	二〇・〇	一一・二	五六・〇〇
同 十二年	一八・四	二六・四	一三・三	一九・三	七・一	三六・七九
同 十三年	一七・九	二五・六	一二・八	一八・四	七・二	三九・一三
同 十四年	一八・六	二六・一	一二・九	一八・四	七・七	四一・八五
同 十五年	一七・八	二四・八	一二・五	一七・六	七・二	四〇・九一
昭和元年						

以上ノ如キ單一ナル材料ニヨル單純ナル統計的觀察ニヨツテ、直ニ都市ト村邑ニ於ケル結核死亡ノ消長ヲ論ズルコトハ困難デアルガ死因統計ニヨル我國ノ結核死亡ハ大正九年頃ヨリ極メテ輕微ナル程度デアアルガ減少ノ傾向ガアリ、ソノ主要ナル部分ハ地方村邑ニ於テヨリモ比較的大人口ヲ包含スル大都市ニ於テ存スルモノナルヲ知り得ルデアラウ。

三 農村ニ於ケル結核調査

實際ニ我國ニ於ケル一萬以上ノ農村ニ就テ結核患者ノ實地調査ヲナスコトハ殆ド不可能デアアルガ、内務省及各地方廳ガ先年來實施シテキル農村保健衛生調査方法ガ醫師タル技術官ヲ主任トシ其下ニ臨牀醫師ヲ配シ全村民ノ健康診斷體格検査糞便検査等ヲ行ヒタルモノニテ、極メテ完全ナル調査デアアル。故ニソノ成績ヨリ農村ニ於ケル結核患者ノ存在ヲ發見スルトキハ大量觀察ヲ要スベキ斯種ノ調査ニ對シテハ今日最モ合理好適ノ材料デアアル。敍上ノ如キ農村保健調査ハ内務

省ニテ直接實施シタルモノ九ヶ村各地方廳ニ於テ實施セルモノ大正十年ヨリ十四年四月迄一二三ヶ村ニ過ギナイ。故ニ僅カニ百數十箇ノ標準的農村ノ成績ニヨツテ全國農村ノ實際ヲ考察シ得テ適當ナリヤ否ヤハ理論上ニ批判ノ餘地モアルコトデアラウガ、農村ニ就テ斯種ノ特殊ナル攻究資料ハ他ニ之ヲ求メ得ラレナイノデアアルカラ是等調査上ノ數字ハ相當信用シ得ベキモノデアルト思フ。

第三表 農村ノ結核(農村保健衛生實地調査ニ據ル)

村略名	調査年次	現在人口	肺結核	其他ノ結核	同比例、人口千ニ付		既往十ヶ年 結核死亡	常住人口千ニ 付結核死亡
					肺結核	其他結核		
静岡縣(ウ)村	大正七	二二二九	三五	三	一・六四	一・四	三一	一・四
山口縣(ヒ)村	大正八	二六五九	三四	三	一二・八	一・一	三四	一・一
福井縣(ア、タ)村	大正八	二六一五	七二	一九	二七・五	七・三	一六六	五・八
愛媛縣(シ)村	大正九	二一八三	八	四	三七	一・八	四六	二〇
京都府(オ)村	大正十	一四六六	七	三	四・八	二〇	二二	一・四
京都府(カ)村	大正十	一四〇四	四	一	九・九	一	一三	三・四
大阪府(ア)村	大正十	一〇一六	二	二	二〇	二〇	一四	一・二
兵庫縣(ホ)村	大正十	二五〇一	三五	一	一四・〇	〇・四	六四	二・二
兵庫縣(イ)村	大正十一	一三二九	一	二	一・五	一・五	二六	二・一
長崎縣(イ)村	大正十	二二八一	二八	一	二一・九	〇・八	一九	一・三
新潟縣(ホ)村	大正十	二〇四七	二	一	一〇	〇・五	二五	一・一
秋田縣(ト)村	大正八	一七六八	五	六	二・八	三・四	一一	〇・六
新潟縣(ヤ)村	大正十	一七〇一	三	二	一・八	一・二	三二	一・五
新潟縣(キ)村	大正十一	二四四二	五	二	二〇	〇・八	六三	二・三
埼玉縣(モ)村	大正十	一八一三	一	二	二〇	一・一	三〇	一・六
埼玉縣(オ)村	大正十	二六二二	三	一	六・一	一・一	四五	一・六
茨城縣(ナ)村	大正十一	二四六八	五	一	二〇	〇・四	二七	一・〇
三重縣(オ)村	大正十	九二八	七	一	七・五	一	一三	一・三
三重縣(ヤ)村	大正十一	一四三三	一四	一	九・八	〇・七	二二	一・五

綜 說 佐藤 本邦農村ニ於ケル結核ノ疫理學的考察

岡山縣(ヨ)村	大正十	一〇九三		一八		三		一〇三		一七		六	〇五
島根縣(シ)村	大正十一	一七四二		一五		四		四七		三		七	一八
福井縣(ア)村	大正十一	三一八九		一五		四		一七		一		〇	四
富山縣(フ)村	大正十	一二七七		一五		四		一七		三		〇	七
岐阜縣(ヒ)村	大正十	三〇五一		七		二		五七		一		一	〇六
山形縣(タ)村	大正十一	一二三三		一六		二		〇八		一		一	一
秋田縣(ウ)村	大正十	一四八三		四		一		二		一		六	一七
青森縣(イ)村	大正十二	一〇七三		一		一		〇六		一		二	一
福島縣(ノ)村	大正十一	一七八七		九		一		二四		一		三	二
滋賀縣(ヤ)村	大正十一	三七九六		六		五		一六		一		三	一
群馬縣(コ)村	大正十	三七九四		一		一		〇三		一		七	一
埼玉縣(モ)村	大正十一	二八六〇		七		一		〇三		〇		三	一
千葉縣(ヤ)村	大正十	一八四四		三		一		三〇		〇		四	〇八
奈良縣(ミ)村	大正十一	九九八		四		一		五		一		一	一
山梨縣(ヤ)村	大正十	七九一		九		三		四三		四		五	九
山梨縣(ニ)村	大正十	二〇九〇		二		一		四三		一		三	一
北海道(シ)村	大正十	三七九三		二		三		五五		〇		八	一
大分縣(イ)村	大正十	二〇一六		三		一		五五		〇		八	一
福岡縣(ヨ)村	大正十	一八〇八		一		二		六一		一		二	〇
島根縣(ミ)村	大正十	七一四		二		一		八二		一		二	二
福井縣(ヨ)村	大正十	一二九八		二		一		九二		一		三	二
山形縣(タ)村	大正十	五二五		二		〇		一		三		六	〇
青森縣(ノ)村	大正十	二五六二		二		一		一		〇		五	一
宮城縣(シ)村	大正十	一五六〇		六		一		四二		一		一	〇
長野縣(ヤ)村	大正十一	一四三七		一		一		〇五		一		〇	〇
長野縣(ミ)村	大正十一	二〇四四		三		一		五		一		一	〇
滋賀縣(フ)村	大正十一	三二九		三		一		九		一		〇	〇
滋賀縣(タ)村	大正十	二〇六八		三		五		一五		二		九	二

德島縣(ミ)村	大正十一	二四四七	四	二	一・六	〇・八	九〇	二・八
愛媛縣(タ)村	大正十一	二三八七	一	二	四・六	〇・八	二四	〇・九
熊本縣(オ)村	大正十	一三二九					二一	一・三
鹿兒島縣(サ)村	大正十	二一四三	四二	三	一九・六	一・四	一七	〇・八
福岡縣(ヒ)村	大正十一	一七六四					三五	一・六
計又ハ平均		九七七六	五一八	九三	五・三	一・〇	一七四八	一・五

備考 各村ノ十ヶ年間平均一ヶ年常住人口ハ二〇八五ナリ茲ニ云フ常住人口トハ本籍人口ヨリ出入寄留者ヲ加除セルモノ

前表ニ於テ觀ル如ク、農村五十二ヶ村ニ就テ村民ノ一々ニ體格検査及ビ健康診断ヲ行ヒタル結果、發見シタル結核患者數ハ調査セル村ニヨリテ多少ノ差異ガアル。勿論、診查ハ各村同一醫師ニヨツテ、同一時日ニ行ハレタモノデナイカラ成績上ニ種々ナル差異ヲ生ズベキ理由ハナイデモナイガ、理論ヲ離レテ是等ノ數字ニ實際的ノ價値ヲ認メルニハ充分ナモノデアアル。

右ノ調査ニ據レバ福井(ア)村・静岡(ウ)村・兵庫(ホ)村・山口(ヒ)村・長崎(イ)村・鹿兒島(サ)村・富山(フ)村・島根(シ)村・秋田(ウ)村等ハ村人口千ニ付、肺結核死亡一〇以上ヲ算スル村邑デアツテ最病毒濃厚ト認ムベキ地方村落デアアル。是等ノ村落ニ於テハ肺結核以外ノ爾他ノ結核性疾患モ亦、相當シテ多イ。是等ノ病毒ノ濃厚ナル村落ニハ或ハ地勢氣候上ノ不良ナル地方、工業上ノ影響アルモノ、職工出稼者ノ多キ地方、寒村ニシテ榮養不給ノ地方、醫療衛生施設ノ備ハラザル地方等、兎ニ角一般保健衛生上ニ何等カ不滿ナル條件ヲ有スル地方村落ト認ムルモノガ多イ。

地方農村ノ中ニ病毒ノ比較的濃厚ナル地方ト比較的濃厚ナラザル地方トノ存スルコトハ、前表ニ於テモ知ルコトガ出來ルガ、更ニ同一府縣下ニ於テモ病毒ノ比較的濃厚ナル地方ト比較的濃厚ナラザル地方トノ存スルコトハ例ヘバ滋賀縣(ダ)村ト(ワ)村・京都府ノ(オ)村ト(カ)村・兵庫縣ノ(ホ)村ト(イ)村・埼玉縣ノ(モ)村ト(オ)村・福井縣ノ(ア、タ)村ト(ヨ)村トノ如キハ同一ノ地方廳ノ當局ニヨツテ同一檢診標準ノ下ニ於テ行ハレタ調査成績ニ夫々相當ノ差異ヲ認メ得ルコトカラモ之ヲ推知シ得ルデアラウ。

斯ク上記ノ農村五十二ヶ村ノ成績ヲ平均シテ通覽スレバ、人口九萬七千七百六十一人ヲ有スル地方農村ニハ五一八人ノ

肺結核患者ト九三人ノ爾他結核性患者ヲ發見スルコトガ出來テ、人口千人ニ付、肺結核患者五・三人、爾他ノ結核患者一・〇人即全結核性患者六・三人ヲ發見シ得ル。

更ニ是等農村ニ就テ、調査時ノ前年カラ既往十年間ノ結核死亡ヲ調査スレバ、或農村ニ於テハ一ケ年間ニ結核死亡者ヲ算スルコト十數名ニ及ブモノサヘアツテ、五十二ケ村ヲ通覽スレバ一ケ村一年間ニ平均三・四人ノ結核死亡ヲ出スコトトナル。而シテ之ヲ村ノ人口ニ對比スレバ常住人口千ニ付結核死亡者ハ一年間ニ一・六人ヲ算スルコト、ナル。以上ノ如ク標準的農村五十二ケ村ノ實地調査ノ結果ニヨリテ農村ノ結核病蔓延ノ狀ヲ類推スレバ、農村常住人口千ニ付、結核性疾患ニ因ル死亡一・六人アリ、一・六人ノ死亡者ノ周圍ニハ五・三人ノ肺結核患者ト一・〇人ノ爾他結核性患者即チ六・三人ノ各種結核患者ヲ算スルコトガ出來ル。即チ農村ニ於テハ結核死亡一ニ對シ同患者四ノ割合デアルコトガ推知セラレル。

前記ノ五十二ケ村ニ就テハ多少詳細ニ其狀態ヲ表記シタノデアアルガ、更ニ此種ノ調査農村數ハ成可ク多數ニ互リテ其平均的數值ヲ求メルコトガ一層精確ナル統計數字ヲ得ル所以ナルヲ以テ、余ハ以上表記セル以外ノ農村二十七ケ村ノ統計的數字ヲモ集計シテ、調査農村七十九ケ村ニ於ケル結核病蔓延ノ狀ヲ觀察シ次表ノ如キ結果ヲ得タ。以テ全國農村ニ於ケル本病流行學ノ一知見タリ得ベシト信ズルモノデアアル。

第四表ニ於テ觀ル如ク、全國ノ調査農村七十九箇村ニ於ケル農村居住者十五萬七千八百〇一人中ニ肺結核患者八百二十七人(内、男三百六十一人、女四百六十六人)爾他ノ結核患者百九十一人(内、男八十一人、女百〇九人)ヲ發見シタ。

第四表 農村ニ於ケル結核患者 (内務省調査七ケ村 各地方廳調査七十二ケ村)

實數	檢査人員		肺結核		其他ノ結核	
	男	女	男	女	男	女
七八、三四五	七九、四五六	一五七、八〇一	三六一	四六六	八一	一〇九
計			四・六	五・九	一・〇	一・四
計						一・二

第五表 農村ニ於ケル結核死亡 (調査時既往十ケ年間 調査村數七十七ケ村)

實 數	男		女		計
	肺 結 核	結 核 性 腦 膜 炎	肺 結 核	結 核 性 腦 膜 炎	
肺 結 核	八四五	九二九	一七七四		
結 核 性 腦 膜 炎	九七	六三	一六〇		
腸 結 核	二〇六	三七六	五八二		
爾他臟器ノ結核	八四	七三	一五七		
肺 結 核	四五・九	五二・六	四九・二		
結 核 性 腦 膜 炎	五・三	三・六	四・四		
腸 結 核	一一・二	二一・三	一六・一		
爾他臟器ノ結核	四・六	四・一	四・四		
千ニ付	六七・〇	八一・六			
計(全結核)					一四・四

即チ我國ノ標準的農村ニ於テハ、検査人員千ニ付キ、男ニ於テハ肺結核四・六人、其他ノ結核一・〇人、計五・六人、女ニ於テハ肺結核五・九人、其他ノ結核一・四人、計七・三人ノ結核患者ノ存在スルモノナルヲ推定シ得ル。男女ヲ平均スレバ、五・二人ノ肺結核、一・二人ノ爾他結核ニテ計六・四人ノ結核患者ヲ推算シ得ル。是等ノ數値ハ前述セル調査農村數五十二ヶ村ニ於ケル場合ノソレト殆ド、相一致スル。故ニ余ハ上記ノ各推定數ハ本邦農村ニ於ケル結核患者推定率數トシテ信用シ得ベキ數値デアルト思フ。例之、上述ノ如ク農村結核患者平均率(男女平均)ハ人口千ニ付六人四分デアルカラ、我國全農村住民三千三百九十八萬三千六百六十二人中、二十一萬七千四百九十五人強ノ結核患者(各型ヲ含ム)ノ存在スルヲ推定シ得ルデアラウ。

次ニ農村ニ於ケル結核死亡ニ就テハ、農村調査時ヨリ既往十ヶ年間ニ遡ツテ各種結核死亡ヲ調査スレバ、總死亡率ニ就テ男ハ肺結核四五・九結核性腦膜炎五・三腸結核一一・二爾他ノ結核四・六デアツテ全結核ハ六七・〇デ、女ハ夫々、五二・六、三・六、一一・三、四・一デアツテ全結核ハ八一・六デアアル。是ヲ以テ觀レバ、農村ノ住民ノ各種總死亡千中ニ、男子結核死亡ハソノ六七・〇ヲ占メ女子結核死亡ハソノ八一・六デアアル、男女ヲ平均スレバ、七四・一トナル。是等ノ數値ハ亦、農村ニ於ケル結核死亡ノ推定千分率ト見做シ得ルデアラウ。

以上ノ結核患者及死亡調査ニ於テ觀ルニ、農村ノ結核ハ男子ヨリモ女子ニ濃厚ニ蔓延セルヲ窮知シ得ルデアラウ。此現

象ハ我國ニ於ケル結核死亡ガ常ニ男子ヨリ女子ニ於テ高率ナル事實ノ一部ヲ構成スルモノデアラウ。

四 農村結核ニ關スル特殊調査

農村ニ於ケル結核ノ蔓延ハ如何ナル實狀ニアルカ、如何ナル原因ガ病毒播布ノ誘因タルヤ等ヲ知ルコトハ本邦ニ於ケル結核ノ豫防撲滅上ニ最緊要ノコトデアアル。第一ニ余ハ中央及地方廳ニテ施行シタル農村衛生實地調査中、最モ結核蔓延ノ度高シト認ムル數箇農村ノ調査成績ヲ觀察シ、今日我國農村ニ於ケル結核侵襲蔓延ノ原因主トシテソノ社會衛生的素因ヲ探究シテ見ヤウ。

一、岐阜縣洲原村

本村ハ調査當時、(大正十三年)人口三〇六九人戸數五五八戸ニシテ交通比較的利便ナル農村デ、商工業地トシテノ色彩ヲ有セズ農村トシテ標準的ナモノデアアル。死亡原因中、多數ヲ占ムルモノハ傳染病及全身病、呼吸器ノ疾患、消化器疾患等デ、結核性病死亡ハ人口千ニ付、三・三二人デアアル。

大正四年ヨリ同十三年ニ至ル十ケ年間ノ死亡原因ヲ其病類別ヨリ觀レバ第一位肺結核七三名(男一六、女五七)第二位氣管枝炎六一名(男三一、女三〇)第三位榮養不良及生育薄弱五九名(男三五、女二四)等デアアル。肺結核死亡ガ女子ニ於テ男子ニ比シ三・五倍強ニ達スルハ注目スベキコトデアアル。

同上年間十ケ年間ノ全結核死亡者ハ計一〇一人ニシテ男二一名ニ對シ女子七四名、コレ亦女性ニ於テ特ニ多數デアアル。就中、特ニ注目スベキハ本村ノ女子ノ結核性腹膜炎死亡ハ男子ノソレノ七倍ニ當リ、女子ノ腸結核死亡ハ男子ノ夫レニ比シ五倍ニ當ル。

年齡階級ニ於ケル結核死亡者ハ二〇歳乃至三〇歳及ビ一五歳乃至二〇歳ニ著シク多數デ、コレハ全國的ノ現象デハアルガソノ性別上ヨリ觀レバ特ニ女性ニ過多ナルハソノ程度ニ於テ異例デアアル。

第六表ニ於ケル如ク各性別ニヨル一〇〇人ノ死亡者中、五〇人以上即チ過半數ガ結核ニヨリテ死亡スルモノハ、男子ニ於テハ一五歳乃至二〇歳ノ八五・七人ヲ最多トシ、女子ニ於テハ二〇乃至三〇歳ノ七〇人及ビ一五歳乃至二〇歳未滿ノ

二、岐阜縣西川村

本村ハ調査當時(大正十五年昭和元年)ノ人口一、七二一人戸數三八六戸デ、洲原村ト同様ニ商工業地デハナイガ、結核死亡ハ比較的
高キ農村デアル。

大正六年ヨリ同十五年ニ至ル十ケ年間ノ村民死亡ノ原因ヲ觀レバ、肺結核ハ死亡原因トシテ第四位ヲ占メテキル。結核性疾患ニヨル死亡ハ人口千ニ付四・二デアル、前同様ノ十ケ年間ノ結核死亡者ハ計六九名デ男二六名、女四三名デ特ニ女子ニ於テ多數ヲ占メテキル。肺結核死亡者ハ計、四五人デアツテ男一五人、女三〇人デアル。即チ女子ノ肺結核死亡ハ男子ノソレノ二倍ヲ占ム。結核性腹膜炎死亡モ女子ハ男子ニ比シ二倍半ノ多數ヲ占メテキル。結核死亡ヲ年齢及ビ性別ニヨリテ總死亡ニ對比シ其ノ百分率ヲ求ムレバ、女子ニ於テハ一五乃至二〇歳ノ六六・七%ヲ最多トシ、二〇歳乃至三〇歳ノ五一・六%、男子ノ二〇歳乃至三〇歳末滿者ノ五二・四%等ガ之ニ亞グノデアル。(第八表參照)

職業關係——結核死亡者ノ死亡診斷書ニハ大多數「農」ト記載セラル、モ、之ハ醫師ニ於テ生前ノ職業ヲ記載セザルモノアルヤノ疑アリシヲ以テ、其ノ家庭ニツキ實地調査ヲナシタ。其ノ結果ハ、

結核死亡者職業別(西川村)

死亡前從事セシ職業	人員	職業別	人員
製絲 工 女	一五	軍 人	三
織物 工 女	八	農 業(都市店員歸還?)	二〇
擦絲 工 女	三〇	小 學 生 徒	三
繰絲 工 女	五	無 職	七
僧 侶	二	其 他	四
		計	六九

即チ主位ヲ占ムルハ農業ニシテ之ニ次グハ製絲女工ノ一五名デアル。今出稼工女ヲ通算スレバ、其ノ數實ニ三〇名ニ及ビ總數ノ四割四分ヲ占テメキル。

概 括

以上、岐阜縣ニ於ケルニケ村ノ調査ヲ概括スレバ、次ノ諸點ハ結核疫學上極メテ注目スベキ事實デアル。

A、一五歳以上三〇歳未満ノ死亡者數多ク其大部分ヲ占ムルモノハ結核性死デアル。

B、結核性疾患ノ死亡比率ハ全國結核死亡平均並ニ全國農村保健調査ニ據ル農村結核死亡平均ニ比シテ異常ニ高イ。

C、女子ノ肺結核死亡ハ男子ノソレニ比シテ異常ニ多イ。

D、女子ノ肺結核死亡者ノ多數ハ生前女工生活ヲ營ムダ者デアル。

E、男子結核死亡者ハ都市出稼歸還者ニ多イ。

F、岐阜縣ノ農村ハ其青年子女ガ縣内及他府縣ヘ職工出稼ヲナスコト多キ地方ノ一デアル。縣外出稼職工ノ數ニ於テ岐阜縣ハ全國中ノ第四位デアル。而シテ斯、ル募集労働者ハ殆ド製絲、紡績、織物等ノ纖維工業ニ従事スルモノデアル。(大正十五年労働者募集年報ニ據ル)

三、福井縣粟田部村

大正八年ニ内務省ニ於テ農村保健實地調査トシテ選定セル所デ純農村デハナイガ、羽二重工業ノ行ハル、コト死亡率及ビ結核死亡率ハ福井縣ガ全國第一位デアルコト等デ同縣ノ調査ハ興味アル事實ヲ覺エテキル。

調査當時ノ人口ハ二、六一五人ニシテ戸數六四〇戸、本村ハ近年ニ至リテ工業愈々發展シ純農村ト稱スルヨリモ工業地ト認ムベキ環境的條件ヲ備エテキル。

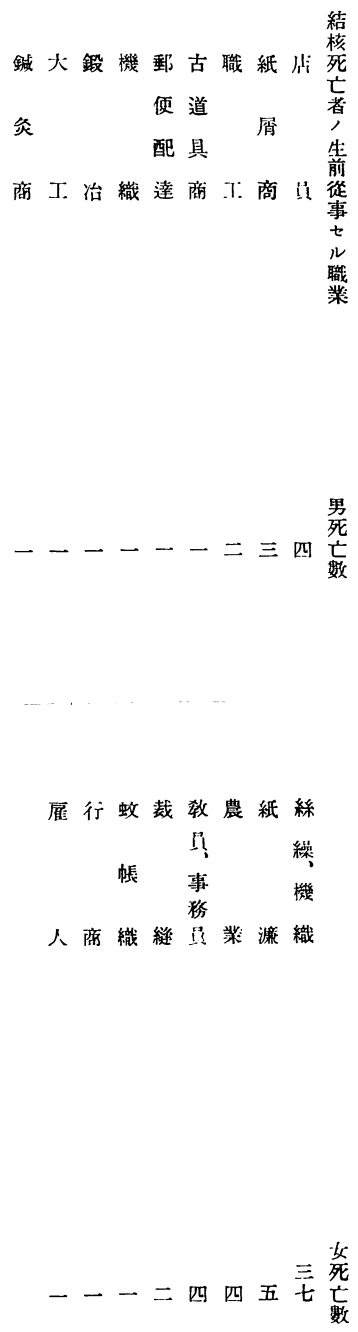
結核死亡——死亡原因(明治四十二年ヨリ大正七年ニ至ル十ケ年間)中特ニ注目スベキハ結核性疾患ノ多數ナルコトデアル。前記十ケ年間ニ於ケル肺結核死亡一二三人、爾他ノ結核四人、計一六六人ニシテ總死亡者ノ約二割ヲ占メ、女子ノ結核死亡者ハ男子結核死亡三九人ニ對シ一二七人ヲ算シ、女子總死亡者ノ二割七分ヲ占ム。

人口千ニ付、肺結核死亡四・二六他結核死亡一・四九全結核死亡五・七五デアツテ全國平均ノ約三倍ノ高率デアル。

結核患者調査、住民ノ身體檢査ノ際、臨牀上ノ所見ニヨツテ結核性疾患ト診斷セシ者ハ男三七人、女五三人計九〇人デ肺結核七二人爾他ノ結核一八人デアアル。

患者ノ年齢別ハ十歳以上四十歳迄ノ青年壯年ニ多ク肺結核ハ人口千ニ付、二七・五ニ相當スル。結核死亡者ノ家庭ヲ職業調査ヲ行フニ。

左ノ中、男子ノ店員、職工等ノ六人ハ東京及大阪ニテ罹病シ歸郷死亡セルモノ、女子死亡者ノ大部分ハ機織、絲織、製紙



等ノ労働職工デアル。

以上、本村ノ結核疫學上注目スベキ事實ヲ概括スレバ次ノ諸點デアル。

- A、結核死亡ハ其率高ク全國平均率ノ約三倍デアツテ、十歳乃至四十歳ニ多イ。
- B、結核死亡者ノ男子ハ殆ド店員職工トシテ都市ニ出稼シ帶患歸郷セシ者テ、女子ニ於テハ絲織機織等郷土工業ニ労働セン職工デアル。
- C、住民ノ結核患者ハ十歳乃至四十歳未滿ノ青壯年ニ多ク人口千ニ付全結核三四・四テ、結核死亡者一ニ對シ患者六ノ割合デアル。
- D、結核患者ノ職業ハ製絲機織業等ノ從業者ニ多イ。
- E、發見セル結核患者ノ六六%ハ其既往症ニ「マラリア」ヲ經過シテ居ル。

以上ハ地方農村トシテ比較的結核死亡率高イ村邑若シクハ職工特ニ女工供給地トシテ顯著ナル村邑ノ住民ノ結核罹病死亡竝ニ其環境状態ヲ考察シタノデアル。

次ニハ農村經濟上ノ近代の傾向トモ見ルベキ商業化竝ニ工業化ヲ認メ得ザル所謂純農村デアツテ、シカモ村民ノ結核患者及ビ結核死亡者高キ數村ニ就テ觀察シテ見ヤウ。

四、秋田縣馬川村

調査時ノ人口一四八三人、戸數二六五戸ヲ算スル純農村デアル。

結核死亡——死因統計(明治四十四年ヨリ大正九年ニ至ル十ケ年間)ニヨツテ結核ニ因ル死亡ヲ觀察スレバ、計十九人(男一〇、女九)デアル。此ガ總死亡百ニ對スル比ハ五・一デ、秋田縣ト殆ンド同率デアルガ同年間全國ノ比率一〇・三ニ比スレバ半以下デアル。即チ、結核死亡ニ於テハ全國平均ヨリ極メテ低率ニアル農村デアル。

結核患者調査——村民ノ身體検査ニ際シ臨牀上、結核ト診斷シ得タル者ハ十八名(男七、女一)デ中、肺結核ハ十六名デアル。年齢別ニハ十五歳——四十歳ノ間ニ最多ク既往人口千ニ付全結核一・二・一四肺結核一〇・八ニ相當スル。

職業的關係——結核患者ノ中、有業者ノ職業的關係ヲ調査スルニ有業者ノ患者ハ十一名(男六名、女五名)デアツテ中、七名ハ農業者デアル。カク多數ヲ發見スルハ本村ハ純農村デ他ニ認ムベキ職業種別ヲ見ナイカラデアル。

五、長崎縣伊福村

調査時、(大正十一年)ノ人口ハ、一、二八一人、戸數ハ二四三戸デアツテ住民ノ移動少ナイ純農村デ商工業地テナイガ一般死亡率ハ比較的高イ村デアル。

結核死亡、明治四十四年ヨリ大正九年ニ至ル十ケ年間ノ死亡原因ヲ調査スルニ其首位ヲ占ムルモノハ呼吸器疾患デ結核性疾患ノ死亡ハ一九人(男一〇人、女九人)デアル。

結核患者、住民ノ體格検査ノ際臨牀診斷上、發見セシ結核患者ハ二十九人デ肺結核ハ二十八人(男二十二人、女六人)デアツテ患者ハ一〇乃至二五歳ニ多ク四五歳乃至五五歳ニ多ク、女子ハ男子ニ比シテ多イ。肺結核患者ハ人口千ニ付、二一・九人デアル。

患者ノ職業的關係、患者ヲ有業者及ビ無業家族ニ就テ觀察スルニ本村ノ住民ノ大多數ハ農業デアルカラ結核患者ノ大多數ハ亦農業デアル。患者二十九人中、二〇名ハ農業者デアル。

是等ノ村邑ハ人口千ニ付キ二〇乃至二二・七ト云フガ如キ多數ノ結核患者ヲ發見スルモ既往十年間ノ死亡數及ビ常住人口對比結核死亡數ハ極メテ少ナイ。(第三表參照)故ニ死因統計等ヨリ一見シテ結核死亡ノ尠少ナルヲ推想スル純農村ニアツテモ、一度全村民ノ詳細ナル健康診斷ヲ行フトキハ意外ニ高率ナル結核患者ヲ發見スベク、既往ニ於ケル死亡屢出

診斷書ニ依ル結核死亡ハ、極メテ尠少デアアルコトヲ知ルノデアアル。余ガ調査成績ヲ觀察シタル中ニモ此他ニ富山縣(フ)村・島根縣(ミ)村・鹿兒島縣(サ)村・静岡縣(ウ)村・山口縣(ヒ)村・兵庫縣(ホ)村等ハ何レモ略々以上ト状態ヲ同ジウシテキル。

農村保健調査ハ全國各府縣ニ互リ一、二ヶ村ヲ調査シタノデアアルカラ、此調査成績ニヨリ村邑ニ於テ結核蔓延度ニ差異アルコトヲ見出し得ルモ、ソレヲ以テ直チニ地方的差異ヲ定ムル標準トハナシ難シ。コハ寧ロ一般死因統計ニ據ルヲ正鵠トスル。タゞ農村ノ調査ニ據ツテ醫師ノ診斷ニヨツテ結核ト届出デラレルモノガ如何ニ不精確デアアルカ如何ニ實際ヨリ少數デアアルカ、小範圍ノ事實ニ就テ明カニセラレ得ル。之ヲ以テ觀テモ、我國ノ死因統計ニヨル結核死亡數ナルモノハ實際ヨリモ遙ニ少數ナルコトヲ推定シテ謬デナイ。

五 出稼歸郷職工ノ結核ト地方結核傳播トノ關係

工場ニ於ケル勞働生活ガ結核ノ感染及ビ發病ニ重要ナル因子ヲナスモノナルハ英獨ヲ初メ各國ノ産業衛生上ニ於テ論議セラレタトコロデアアル。我國ニ於テモ産業ノ發達ニ伴ツテ工場衛生上ニ於ケル結核問題ハ既ニ識者ノ注目ヲ惹イタ所デアツタガ、特ニ出稼職工ノ結核感染及ビ罹病ト其歸郷後ニ於ケル運命、更ニ斯カル帶患歸郷職工ガ鄉村ノ結核蔓延ニ如何ナル影響ヲ及ボスヤ等ノ關係ニ就テモ既ニ大正十年前後ニ於テ注目セラレタ。余ノ閱讀セシ此種ノ調査文献ニテモ新潟縣調査(大正八年乃至九年)岐阜縣調査(大正十年)愛知縣工場課調査(大正十年)等ヲ初メトシテ多數ノ出稼職工供給村邑ヲ中心トセル特殊ノ調査ガ行ハレタ。是等ノ調査ハ殆ンド何レノ各府縣ノ工場課及ビ衛生課等ノ協同ニヨツテ行ハレタモノデ、必ズシモ全國各地ニ於テ一様ナル目的ヤ標準ニヨツテ調査サレタモノデハナイカラ之ヲ蒐集シテ一定ノ批判ヲ結ブコトハ困難デアアルガ、他ニ適當ナル材料ノナキ今日貴重ナル資料タルニ恥チナイ。近時内務省社會局ニ於テモ女子ノ健康状態ニ關シテ調査ヲ行ツタ。調査ノ範圍ハ全國的デ調査項目モ詳細ニ互リ職工數モ一二三四九名ノ多數ニ昇ツテキルノデ、工場生活ト結核問題ヲ考察スルニハ貴重ナル資料デアアル。

(二) 各地方廳、ニヨリテ行ハレタル工場歸郷者健康状態調査。

内務省衛生局ハ昭和二年十月ニ各地方廳ニ通牒ヲ發シテ各地方ニ於テ從來施行セラレタル工場ヨリ歸郷シタ者ノ健康状態ニ關スル調査成績ヲ蒐集シタ。之レニ據レバ昭和二年十月迄ニ斯種ノ調査ヲ行ヒタルハ神奈川・新潟・埼玉・群馬・茨城・三重・山梨・岐阜・岩手・秋田・徳島・愛媛・高知・鹿兒島・沖繩ノ十五縣デアル。

各縣ニ於ケル調査ノ方法ハ一定ノ期間ヲ劃シテ該期間ニ帶患シテ工場ヨリ歸郷セシ職工ノ健康狀況ヲ各警察署ニヨリテ調査セシモノガ多ク調査事項・工場ノ種類・調査職工ノ範圍等ハ各縣ノ調査ニ於テ區々異同デアツテ、最モ遺憾ナノハ患者ノ認定ニ際シ醫師タル官吏ノ診定ヲ得ザルモノ、混在スルコトデアル。

今是等諸縣當局ノ調査成績ノ一部ヲ抄出シテ見ヤウ。

(1) 新潟縣調査

大正十二年ヨリ大正十五年迄ニ於ケル疾病歸郷職工數ハ八五八人テ内、結核患者一三八人ニシテ帶患歸郷者ノ一六・〇％ニ相當ス。是等疾病職工ノ年齢ハ何レモ十六歳以上ニシテ、大部分ハ肺結核ニ侵サレ、一五人即チ八三・〇％餘ハ死亡セリ。而シテ是等一三八名ノ患者中工場勞動者トシテノ年數ハ一年未満ニ四名、一年乃至二年、二十三名二年乃至三年二十七名、三年乃至五年四十名、五年乃至一〇年二十二名デアル。

別ニ新潟縣ニ於テハ縣下ヨリ他府縣(主トシテ長野、群馬、福島)ノ製絲工場ニ出稼スル工場ノ比較的多數ナル四郡即チ製絲女工供給地ニ就テ出稼出發前ト年未歸郷時ニ際シ同一女工ノ身體検査(警察醫施行)ヲ行ヒ一ケ年間ノ工場生活ガ保健上ニ如何ナル影響ヲ及ボスヤヲ觀察セリ。(大正八年乃至九年調査)該調査ニ於テ、受檢セル出稼女工總數四三四名中、中途帶患歸郷者ハ一三三名約三・〇％ニシテ比較的少數ナルモ此帶患歸郷者中、結核性疾患ハ肺結核三三名、結核性肋膜炎十二名結核性腹膜炎一〇名肺炎加答兒四名、淋巴腺結核一名、其他一名計六二名(四六・六〇％)ニ達シ、此内、一ケ年以内ニ死亡セル者三三名ニ及ビ、總検査人員ニ對スル肺結核死亡率ハ五・七(人員千ニ付)ニシテ、之ヲ同縣ニ於ケル既往最近五ケ年平均人口對肺結核死者千分比一・一ニ比較スレバ約五倍ノ高率ナルヲ認メタ。一年間ノ工場生活間ニ斯如ク高率ナル結核患者ヲ發生スルハ單ニ之レヲ工場内ノ感染ト云フヨリモ在郷時ニ既ニ結核感染ヲ有シ潜伏性ノ状態ニテ工場生活ヲ行ヒ遂ニ發病ヲ促シタルモノナルモ、斯カル多數ノ患者ガ歸郷後其家族及周圍ニ病毒ヲ傳播セシムルハ地村農村ニ於ケル結核豫防上留意スベキコトデアル。

(2) 埼玉縣調査

縣下ニテ職工五十人以上ヲ使用スル工場中、寄宿女工ヲ主體トスル製絲紡績織物工場ニ就テ大正十四年間ニ於ケル調査デアル。本縣ノ調査ニ於テハ毎月工場ヨリ提出スル疾病負傷月報ヨリ疾病歸郷女工八四名ニ就キ所轄警察署ニ調査ヲ依頼シタモノデ、興味アルハ工場ニ於テ工場囑託醫ガ診斷シタル病名ト歸郷後ノ治療醫ノ診斷トガ著シク相違セルコトデアル。カ、ル差異ノ中特ニ注目スベキハ結核性疾患呼吸器疾患等ガ歸郷後ニ増加スルコトデアル。之レ工場ニ於テハ發病初期ナル爲ニ結核性疾患等ノ診定ノ困難ナル點モアランモ或ハ工場側ノ策略上ヨリ來ル場合モアルナランガ何レニシテ

モ呼吸器系疾患(肺結核、肺炎、カタル、氣管枝、カタル、肋膜炎、腹膜炎、肺炎等)が全疾患ノ約三割ヲ占メテ居ルコトハ注目ヲ要スルコトデアアル。即チ八十四名ノ帶患歸郷者中、三十一名ハ呼吸器系統患者デアツテ中、九名ハ明ニ家庭ニ其素因ヲ有スルモ他ノ二十二名ハ家庭ニ認ムベキ系統素因ヲ有セズ、且ツ工場生活ニ入ル以前ニ於テハ何レモ健康ニシテ工場ニテ労働ニ從事中、病覺ニ侵サレタモノデアアル。故ニ是等ノ患者ハ恰モ工場内ニ於テ傳染シタモノ、如クデアアルガ、果シテ工場内ニ於ケル傳染ト謂ヒ得ベキヤ否ヤ、我國ニ於ケル結核病毒ノ蔓延及ビ結核感染ノ學術的根據ヨリスレバ遽ニ斷定ラ下シ難キコトデアアル。

(3) 茨城縣調查。昭和二年一月ヨリ十月末日迄ノ間ニ於テ工場ヨリ歸郷セシ者ノ健康状態ヲ調査ス。調査總數二五五名中、呼吸器病ニ因ルモノ十七名(六・六七%)其他ノ各疾患ニ因ルモノ三十八名デアアル。呼吸器患者中ニハ男子一名モ認メズ凡テ女子デアアル。十七名中、十五名ハ紡績及製絲工女デアアル。此調査ニ依テモ紡績製絲工場ノ女工ノ帶患歸郷原因ハ呼吸器性疾患が其大部分ヲ占メテ居ルコトガ明デアアル。

(4) 愛知縣調查。同縣工場課ニ於テハ大正九年及十年ニ互リ縣下ノ比較的多數ノ女工供給地ニ就テ調査シタコトガアツタ。其注目スベキ結果ハ歸郷後死亡女工ノ死因ハ過半数(約五割九分)ハ肺結核ヲ其結核死亡率ハ一般ノ肺結核死亡率ニ比シ遙ニ高イ、歸郷後肺結核死亡女工ノ解雇理由ハ大部分(約九割)ハ病弱ノ故ニシテ且其大部分(七一・一八%)ハ歸郷後一年以内ニ斃レテ居ル。

(5) 三重縣調查。本調査ハ工場ト農村ニ於ケル結核關係ヲ究メン爲ニ行ヘルモノニシテ比較的多數ノ材料ニツキ整頓セル調査ト認ムベキモノデアアル。大正十二年七月ヨリ同十四年六月ニ至ル二ケ年ニ於ケル縣内及縣外ヨリ帶患歸郷セル女工ニツキ結核若クハ之ニ疑アル者一三五名ノ家庭ニ於テ該女工及其家族ノ健康診斷ヲ行ヒ、歸郷後死亡セル者ニ對シテモ其死亡診斷書及家族ノ健康診斷ヲ行ヒ且、其市町村ニ於ケル一般住民ノ結核死亡狀況等ヲ參考トシテ調査シタ。職工ノ業務ハ織布及製絲デアアル。調査地ハ同縣ノ職工供給地ト認ムベキ十ヶ村ヲ選定シ實查戸數ハ二五戸ヲ廢業職工ハ二七名、其家族一三三名デアアル。調査成績ヲ觀レバ、帶患廢業職工二七名中、二〇名(全數ノ七四・一%)ハ結核性疾患ニ因リ、内、肺結核ハ一二名(全數ノ四四・四%)肺炎「カタル」三名テ、他ノ患者七名ノ内、二名ハ結核性タリシヲ疑フベキモノデアアル。廢業職工二五戸ニツキ既往十ヶ年間ニ於ケル家族ノ死亡ニツキ調査スルニ、結核性疾患ニ因ル死亡ヲ莫スルモノ各種死亡者ノ一八・八%ニ相當スル。次ニ職工家族ノ健康状態ヲ觀ルニ、家族一二三名中、疾病ヲ有スル者ハ九名、即チ七・三%ノ罹病率テ、此罹病者中、結核性疾患ハ死亡職工ノ家族中ニ於テノミ三名ヲ發見シタ。本縣ニ於テハ特ニ總死亡ノ一割強ハ結核性疾患死亡ニシテ女子ノ結核死亡率が常ニ男子ノソレヨリ高キ村ノ五ヶ村ニ就テ調査シタルニ、女子ノ肺結核死亡總數中、工場労働ノ經歷ヲ有スルモノ四六・九%ヲ占メ、其他ノ結核死亡中、工場労働ノ經歷アルモノハ五三・三%ヲ占メテ居タ。

(6) 山梨縣調查。特ニ此種ノ調査ヲ行フタノテハナイガ、昭和二年八月ニ或村落ニ腸「チフス」ノ發生ガアツテ、同部落ノ全民健康診斷ノ際ニ埼玉縣ノ或工場ヨリ帶患歸郷セル者三名アツテ、中二名ガ肺結核核殘リ一名ハ肋膜炎ナルコトニ驚イテ同工場ヨリ帶患歸郷セル縣内職工ノ調査ヲ行フタ。大正十三年以

來、埼玉縣ノ工場ニ出稼シ帶患歸郷シタル者ハ七三名ニ達シ是等ノ患者ニ就テ其主治醫ヨリ病名ノ調査ヲセシメタルニ六名ノ肺結核患者(〇・八二%)ヲ發見シタ。

(7) 岐阜縣調査 第四項「農村結核ニ關スル特殊調査」ニ於テ述ベタル所ハ亦、工場生活ト農村結核トニ就テノ諸事實ヲ物語ルモノデアアル。

岐阜縣警察部當局ハ出稼職工ノ身體診斷ニ就テ夙ニ周到ノ留意ヲナシタコトガアツタ。同縣ガ女工供給地トシテ名アル地デアツテ、特ニ飛彈國及ビ郡上郡ニ於テハ出稼女工ノ工場出稼中種々ナル疾患就中、結核性疾患ニ罹ツテ中途工場ヨリ歸郷シ其病毒ヲ周圍ノ地方ニ撒蔓セシムルモノガ漸次増加スルノ傾向ガアツタノテ大正十年ニ飛彈國三郡ニ就テ女工ノ出稼地方ニ出發スル前竝ニ冬季歸郷ノ後ノ二回ニ身體診斷ヲ行ヒ、職工ノ出稼ニヨツテ蒙ル罹病ノ實況ヲ調査シタ。ソノ大要ヲ觀ルト出稼職工ノ出發時ニ發見スル各種患者ハ受診者總數(四七二五人)ノ六分六厘弱デアツテ、歸郷時ニ發見セル患者數ハ受診總數(三九五一人)ノ七分七厘弱デアツタ。ソノ罹病ニ對スル工場生活ノ影響等ハ明白ナル成績ヲ示シテキナイガ、出發時ニ於ケル帶患ノ種類ト歸郷時ノ帶患ノ種類トハ其發見頻度ニ於テ多少ノ差異ヲ認メタ。例ヘバ歸郷時ニ於テハ頸腺腫、肋膜炎、及ビ肺結核疑似症等ノ絕對數ニ就テ増加セルコトハ注目スベキ現象デアラウ。

(8) 秋田縣調査 大正十五年一月ヨリ昭和二年六月末日迄一年半ノ期間ニ於ケル紡績・織物・製絲等ノ工場ヨリ帶患歸郷セル者ヲ居住地ノ警察官憲ニテ調査シタモノデアアル。同歸郷職工數ハ一八七名テ其中、呼吸器性ノ疾患トシテハ

肋膜炎患者	三四(歸郷總數ニ對スル一八・一八%)
肺炎加答兒	一〇(同前 五・三五%)
肺結核	七(三・七四%)
頸腺結核	一(〇・五三%)
潜伏性結核	二(一・〇七%)
氣管枝炎	二五(一三・三七%)

デアアル。右ノ中、潜伏結核、氣管枝炎ノ如キハ甚タ不明瞭ナルモノデアアルガ、前者ハ凡テ、後者ニ於テモ約三〇%ハ一年以内ニ死亡シテキル點カラ推定シテモ或ハ結核性ナルヲ疑ヒ得ルニ充分デアラウ。

(9) 徳島縣調査 大正十四年ヨリ昭和二年十月ニ至ル期間ノ工場歸郷者ニツキ疾病ヲ調査シタ。調査職工數等ニ不明瞭ノ點ガアルノテ集計シ難イモ職工ノ罹病ハ結核性疾患ガ多ク且ツ、女工ハ常ニ男工ヨリモ罹病ガ高率デアアル。斯カル女工ノ工場ハ多クハ紡績製絲織布工場デアアル。

(10) 鹿兒島縣調査 同縣衛生課ニ於テハ同縣ノ職工供給地タル一町二村ヲ撰擇シ同地ヨリ縣内外ノ工場ニ出稼セシ男女職工ニシテ大正五年ヨリ同十四

年ニ至ル十ケ年ニ歸郷セシ男六二名女八二三名計八八五名ニツキ各戸調査ヲ行ツタ。調査人員八八五名中、家事都合ニテ歸郷セルモノハ五〇四名(五六・九%)疾病ニ依ルモノ二二〇名(二三・七%)テアル。出稼者歸郷後ニ健在ナルモノハ八八五名中、七一七名即チ八一・〇%、罹病中ノモノ一〇〇名即チ一一・三%、死亡者ハ六八名七・七%テアル。出稼者總數中、呼吸器疾患ニ罹レルモノ一二四名(一四・〇%)テソノ罹病率ハ十五歳ヲ中心トシテ漸次其數ヲ増シテキル。即チ十五歳前後年齢階級ニ於テ罹病スルモノガ多イ。ハ出稼工ガ男子ヨリモ女子ニ於テ遙ニ多數ヲ占メテ居ル故モアル。呼吸器疾患ヲ理由トシテ歸郷セルモノ一二四名中、大多數ハ紡績工場ニ生活セルモノデ、本病罹病ノ八二・三%ニ達シ、他ハ織物・製麻・製絲等ノ順位テアル。出稼年月數ト呼吸器疾患罹病トノ關係ヲ見ルニ、一ケ年以上二ケ年未満ノモノガ第一位テ出稼者ノ三七・九%ヲ占メ、二ケ年以上三ケ年未満ガ第二位テ二二・六%、第三位ハ六ケ月上一ケ年未満テアル。呼吸器病罹病者一二四名中、結核ハ第一位テ六六名(五三・二%)ニ達シ第二位ハ肋膜炎テ四四名(三五・五%)テアル。歸郷後ノ死亡者ハ其八二・三%ハ紡績工場生活者テ、女子死亡者ハ其八二・八%ハ紡績女工テアツタモノテアル。此ノ女工死亡者六四名ニ就キ呼吸器疾患罹病ノ場所ヲ調査スルニ左記ノ如ク工場内テ發病シタモノガ總死亡數ノ八割強ニ相當シ、マタ男死亡者ノ四名ハ悉ク工場内テ發病歸郷シタモノテアル。

女工ニシテ工場内ニテ發病歸郷セシ者 五二名 八一・三%
健康ニテ歸郷シ其後發病セシ者 一二名 一八・七%

計 六四 一〇〇・〇%

以上ノ外、神奈川、群馬兩縣ノ調査成績ハ震災其他ノ事情ニヨリ之ヲ知り難ク岩手・愛媛・高知諸縣ノ成績モ記載上不明ノ箇所アリシヲ以テ省略シタ。

(二) 社會局ニヨリテ行ハレタル歸郷女工ノ健康状態ニ關スル調査

内務省社會局ハ大正十五年八月ヲ以テ全國地方廳ニ通牒シテ、常時職工五〇人以上ヲ使用スル工場ニテ大正十二年乃至十四年中ニ疾病未治ノ儘解雇セラレタル職工ニ就キ歸郷前ハ工場ニテ、解雇後ハ郷里ニ於テ調査記入シタルモノヲ基礎トシテ觀察シタモノデ調査職工數ハ一二、二九四名ニ達シタ。

該成績ニ據レバ未治癒解雇者ノ疾病中第一位ヲ占ムルハ呼吸器疾患ニシテ結核ハ三・七一%ヲ占メ、結核ト其他ノ呼吸器疾患トヲ合シテ考察スレバ、未治解雇者ノ約半數(四割五分弱)ハ結核性疾患ト觀テ過謬ガナイ。工業別ニ觀察スレバ左表ノ如クデ、結核ハ紡績織物製絲其他ノ工業ヲ合セルモノニ於テ大差ナク他ノ呼吸器疾患ハ紡績女工ニ特ニ多イ。

	紡績	製絲	織物	其他	總體
呼吸器病	四五・二七%	三三・九七%	三七・七一%	三二・九六%	四一・一七%
結核	四・一四	二・九〇	三・二七	三・二一	三・七一
消化器病	一〇・六〇	二三・七八	一六・四五	一九・一三	一四・五〇

解雇歸郷者ノ約六割弱ハ治愈セルモ、二割二分弱ハ死亡シ死亡者ノ五割三分強ハ解雇後半年以内ニ死亡シテ居ル。死亡ノ状態ハ結核死亡率最高ク五六・二%ニ達シ、他ノ呼吸器疾患死亡ハ三一・二〇%デ結核ニ次デ高イ。呼吸器系疾患ノ死亡ハ總死亡ノ五九・二〇%ヲ占メ結核ハ九・五九%デアツテ兩者ヲ合スルトキハ六八・七九%ニ達シ同年間ノ帝國死因統計ニ因ル纖維工女死亡ノ兩者ノ和五〇・九七%ヨリ高率デアル。死亡率ヲ工業別ニ觀レバ、紡績業ニ最も低ク製絲業最も高ク織物ハ中間ニ位シテキル。年齡關係ニ就テハ各府縣ノ調査ニ前述セルト略々同ジク女工ノ最も死亡多キ年齡階級ハ十六歳乃至二十歳ニアリト推定シ得ル。

(三) 總括

以上ノ諸調査ニ於テ觀ルガ如ク工場労働者ノ歸郷原因トシテ疾病ハ重要ナル因子ヲナシ且ツ其頻度が高イ。是等帶患歸郷者ノ疾患トシテ常ニ最も多キハ結核性疾患デアル。其患者ノ死亡率ノ最高キモ結核性疾患ニ因ルモノデアル。工場労働ノ長期ニ亙ルモノハ一般ニ此死亡ノ割合ガ多ク三年乃至五年未滿ノ者ガ最高デアル。即チ斯カル事實ハ工場生活中、結核病毒ニ感染セルモノトモ考ヘラレケレドモ、一方ニハ短期間ニ於ケル調査ニ於テ、僅々一年間ノ工場生活ノ爲ニ高率ナル結核患者ノ發見ヲナシタル場合モアツテ既ニ工場ニ入ルニ先ツテ結核感染ノ事實アリシヲ推想セシムルヤウナ事例モ稀デナイ。歸郷職工トシテ病患者ハ女子ニ於テ著シク工業別トシテ紡績・織物・製麻・製絲等ノ所謂纖維工業職工ナルヲ考慮スレバ、是等帶患者就中、結核病者ハ女工ニ極メテ高率ニ發見セラル、コトハ明デアル。如上ノ如キ諸事實ハ全國的ニ調査セル場合モ比較的ニ著明ナル職工供給地タル村落ニ於ケル調査ニ於テモ相一致セル現象トシテ認メ得ル。而シテ既ニ出稼前ニ結核ニ感染セル者ガ工場生活後ニ發病セル者或ハ長期ノ工場生活中ニ感染セル者等感染ニ就テハ種々ナル動因ガアルデアラウガ、何レモ工場ニ於ケル労働生活ガ發病ノ直接動因タリシコトヲ推想セシムル事實ガ多イ。

斯如ク工場勞働者ニシテ帶患歸郷セル結核患者ガ鄉村タル地方ニ對シ結核傳播上ニ影響ヲ及ボスモノアルハ夙ニ識者ノ窮知スル所デアアルガ、其如何ナル程度ニ影響スルヤハ之ヲ明確ニ知ルハ極メテ困難ナコトデアアル。然レドモ歸郷病職工ノ家族ニノミ結核患者ノ發生ヲ觀タルガ如キ(三重縣調査)又、歸郷結核女工ノ看病ニ從事シタル家族ニ結核患者ニ發シタル者四六例ヲ觀タルガ如キ(社會的調査)ハ明ニ歸郷女工ガ地方村ニ結核ヲ傳播セシメタル經路ヲ示セル事例デアラウ。

六 職業別ヨリ觀タル農業者ノ結核死亡

職業別ニヨリ結核罹病及ビ病毒蔓延ノ情勢ヲ調査スルコトハ困難デアアルカラ、茲ニハ帝國死因統計ニ據テ農業ナル職業ノ從業者ガ結核死亡ヲ蒙ル程度ヲ觀察シテ見ヤウ。素ヨリ農村ノ居住者ガ必ズシモ農業者デナク總テノ職業類似ヲ有スルコトハ明デアアルガ、此處ニハ單ニ農業從業者及其無業家族ノミニ關スル統計的數字ヲ掲ゲテ一端ノ參考ニ供スルノミデアアル。

余ハ嘗テ他ノ必要ニヨリ大正六・七・八年ノ職業別結核死亡數ヲ摘記シタコトガアルカラ、ソレヲ掲ゲテ見ヤウ。丁度農村保健衛生調査モ同年頃ニ初メラレタコトデアアルカラ對照ノ便トモナラウ。

第六表 職業別肺結核死亡累年比較

職業別 (大分類)	大正八年			大正七年			大正六年 (實數ヲ省略ス)
	肺結核死亡 (實數)	有業者及其家族	總死亡	肺結核死亡 (實數)	有業者及其家族	總死亡	
一、農業、牧畜、養蠶等並ニ林業及狩獵	五四,九九八	有業者及其家族	七四九,三四三	七三,三四	有業者及其家族	八七七,五九六	七,五八〇
二、漁業及製鹽業	二,七七九	有業者及其家族	三三,六八四	八,二五	有業者及其家族	四一,九八三	八,五三三
三、鑛業及冶金業(第四ヲ除ク)	七八二	有業者及其家族	七,四三二	一〇,五二	有業者及其家族	一〇,〇二七	一〇,八七
四、石炭及石油ノ採取及精製業	八〇二	有業者及其家族	一一,二九二	七,一〇	有業者及其家族	一一,三四五	八,一六
五、土石類ノ採取及製造業	七二一	有業者及其家族	五,一六六	一三,九五	有業者及其家族	六,二七五	一一,〇〇一
六、金屬ニ關スル製造業	二,五六七	有業者及其家族	一六,七二〇	一五,三五	有業者及其家族	一九,六七四	一一,二二二
		總死亡	七三三,四三三	付肺結核死亡	總死亡	六,八八〇	總死亡百中
		付肺結核死亡	七三,三四	有業者及其家族	付肺結核死亡	七,三三一	省略ス

七、	機械器具製造業	九七三	五、八九六	一六・五〇	一、〇一三	六、五三三	一五・五一	一六・三六
八、	化學的製品及類似品製造業	二三〇	一、六四六	一三・九七	二五三	一、九七〇	一二・八四	一五・二四
九、	綿絲織物編物等ノ製造業	三、五二二	一三、九七四	二五・二〇	三、三五二	一四、八七〇	二二・五四	二五・三九
一〇、	染物、其ノ準備、潤色並ニ晒、練業	五三八	三、五三二	一五・二二	六五五	四、二四八	一五・四二	一四・〇一
一一、	紙、皮革、謄謨ニ關スル製造業	六五四	三、九五九	一六・五二	六六〇	四、五〇八	一四・六五	一七・九四
一二、	木竹類ニ關スル製造業	二、一六六	一六、四六七	一三・一五	二、四二八	一九、二六八	一二・六〇	一三・七六
一三、	飲食料品及嗜好品製造業	一、一六七	八、六九八	一三・四一	一、一八一	九、九五八	一、八九	一三・二九
一四、	被服及身ノ廻り品製造 洗濯、湯熨	二、一五四	一、一三五	一九・三四	二、二四三	一二、七〇三	一七・六六	一九・六九
一五、	土木建築業	四、三四一	三三、七〇五	二・八七	四、七〇三	三九、一二五	二二・〇二	一三・五五
一六、	銅版、石版、木版等ノ彫刻、印刷及	六五六	二、五五五	二五・六七	六六四	二、九九八	二二・一四	二三・六八
一七、	寫真業	三、三四二	一七、一六七	一九・四六	三、一〇三	一八、四九四	一六・七八	一九・一九
一八、	其ノ他ノ工業	一九、〇一九	一三二、〇三二	一四・四〇	二〇、一三〇	一四九、八七八	一三・四三	一四・七〇
一九、	交通業(第二十、第二十一ヲ除ク)	二、四四二	一七、二四四	一四・一六	二、四三二	一九、〇三五	一一・七八	一三・二三
二〇、	人力車挽及乗用馬車業	八一〇	五、八一四	一三・九三	九四〇	七、一七一	一三・一〇	一四・九〇
二一、	船舶運輸業	九七一	八、九四〇	一〇・八六	一、〇二七	一〇、三五九	九・九一	一一・三一
二二、	公務及自由業(第二十三及第	四、八九七	三三、一一三	一四・七八	五、〇一三	三八、三七八	一三・〇六	一四・六五
二三、	現役陸軍及海軍	四二二	三、〇三四	一三・九〇	四〇八	三、六〇〇	一三・三三	一五・二三
二四、	教育ニ關スル業	一、一〇五	六、八五四	一六・一二	一、〇八六	七、六九二	一四・一二	一六・二六
二五、	其ノ他ノ有業者及有業者ニシテ職	七、四四八	五一、一四〇	一四・五六	七、五〇九	五七、二〇四	一三・一三	一四・二二
二六、	業ノ申告詳カナラザル者	一三、〇五三	八一、四二三	一六・〇三	一四、〇五〇	九八、二七〇	一四・三〇	一五・七〇
總	無職業及職業ヲ申告セザル者	一三二、五六五	二八一、九六五	一〇・三四	一四〇、七四七	一四九三、一六二	九・四三	一〇・四〇
數								

此表ニ示ス通り、農業・牧畜業・養蠶・林業・狩獵等ノ純然タル農村ノ生業及ビ漁業及製鹽業等ノ職業ノ有業者及其家族ノ肺結核死亡ハ各年トモ各種職業ニ於ケル肺結核死亡率ヨリモ低位ニアル、即チ農村漁村等ニ於ケル純農業ニ近シト認めラル、前記諸職業有業者及家族ノ肺結核死亡ハ之ヲ彼等ノ死亡原因タル總死亡ニ對比スレバ其率數ニ於テ各種職業中最低位ニアルヲ知ルノデアル。

斯カル状態カラ觀レバ地方ニ於ケル純農村ニハ亦、結核ノ蔓延モ少ナク、肺結核患者ノ存在ノ如キハ前節ニ例示セル如ク

必ズシモ恐ル、ニ足ザルヤウニ感ズルガ、患者死亡届出ノ履行必ズシモ精確ナラザル實際ヲ思ヘバ此間ノ消息モ自ラ推想セラル、所デアラウ。

次ニ最近ノ統計的事實トシテ有業者ノ職業別肺結核死亡表ヲ掲ゲテ見ヤウ。(職業類別項目ノ増加ニヨリ前表トハ直接比較シ得ズ)

第七表 有業者ノ職業別肺結核死亡(大正十四年)

職業	總死亡百中肺結核死亡		肺結核死亡		總死亡	
	男	女	男	女	男	女
一、農業、畜産、蠶業	六・七二	八・〇二	九一五九	七〇二八	一三六三一七	八七六六〇
二、林業	六・一九	六・二五	五一	六	八二四	九六
三、漁業、製鹽業	九・〇五	九・一三	五九五	二二	六五七一	二四一
四、採礦冶金業	一〇・四五	一三・九七	三〇六	八三	二九二七	五九四
五、土石採取業	一四・一三	一	一三	一	九二	二
六、窓業	一五・九七	一・二六六	一四八	一〇	九二七	七九
七、金屬工業	一九・六八	一四・九四	七六二	一三	三八七二	八七
八、機械器具製造業	二〇・七九	二二・二二	三五七	一〇	一七一一	四五
九、化學工業	一八・七八	三一・三四	八六	二一	四五八	六七
一〇、纖維工業	二〇・二九	三一・五五	七〇二	一三三九	三四五九	四二四四
一一、絲工業	一四・六五	一八・八〇	一〇四	二五	七一〇	一三三
一二、皮革、骨、角、甲、羽毛	一九・七四	二八・五七	四五	四	二二八	一四
一三、品製造業	一一・四一	一一・六七	六三	二一	四九四一	一八〇
一四、木竹類、關スル製造業	一一・二四	二〇・二二	三四二	八八	二七七七	四三五
一五、飲食料品嗜好品製造業	一一・三二	二〇・二三	五七七	一六三	二六六〇	七一
一六、被服身ノ廻品製造業	一一・六九	二二・九三	一三一	一六三	九九二九	一〇四
一七、土木建築業	一一・二〇	一五・三八	三五八	一六	一〇四二	一〇四
一八、製版印刷製本業、 藝藝娛樂裝飾品製造業	三三・三六	三五・三八	一二七	二二	四六一	六五
計	二七・五五	一六・三九	二六・二五	一〇	一三七一	一〇〇三三
計						五二二

綜 說 佐藤 本邦農村ニ於ケル結核ノ疫理學的考察

一九、瓦斯電氣及天然力利用ニ關スル業	二〇・七六	二五・〇〇	二〇・八五	一九六	五	二〇一	九四四	二〇	九六四
二〇、其他ノ工業	二〇・〇九	三四・四五	二六・四八	一七二	二三六	四〇八	八五六	六八五	一五四一
二一、物品販賣業	一三・二四	一〇・〇八	一二・七九	三〇四二	三八七	三四二九	二二九六九	三八〇	二六八〇九
二二、媒介周旋業	一四・三三	一〇・一七	一四・一〇	一四九	六	一五五	一〇四〇	五九	一〇九九
二三、金融保險業	二二・四一	一九・〇五	二二・一五	二八一	二〇	三〇一	一二五四	一〇五	一三五九
二四、物品賃貸業預り業	一一・七九	—	一一・一一	一一	—	一一	八六	一三	九九
二五、旅宿、飲食店、浴場業等	一三・九五	一一・一一	一二・八八	六二五	三〇二	九二七	四四八一	二七一	七一九九
二六、其他ノ商業	一四・六二	九・七一	一三・四九	一五一	三〇	一八一	一〇三三	三〇九	一三四二
二七、通信業	二五・三五	三六・八二	二七・三七	二三八	七四	三一二	九三九	二〇一	一一四〇
二八、運輸業	一五・五四	一二・九二	一五・四七	一一七	二七	一一九八	七五三四	二〇九	七七四三
二九、陸海軍人	二三・二〇	—	二三・二〇	一八四	—	一八四	七九三	—	七九三
三〇、官吏、公吏、雇傭	一八・〇五	一八・四二	一八・〇六	六〇四	一四	六一八	三三四六	七六	三四二二
三一、宗教ニ關スル業	一一・四六	一一・一七	一一・五四	三〇四	四一	三四五	二六五二	三三七	二九八九
三二、教育ニ關スル業	一一・一六	一一・九八	一一・三七	三四八	一三一	四七九	一六四五	五九六	二二四一
三三、醫務ニ關スル業	一一・七七	一八・一五	一四・一五	二六九	二四六	五一一	二二八五	一三五五	三六四〇
三四、法務ニ關スル業	一六・三七	三三・三三	一六・九五	二八	二	三〇	一一七一	六	一七七
三五、記者、著述者	三一・三四	三三・三三	三一・四一	八四	三	八七	二六八	九	二七七
三六、藝術家	二一・九八	一八・一八	二二・六五	一六八	一〇	一七八	七三一	五五	七八六
三七、其他ノ自由業	一四・一五	一八・五八	一六・一四	一〇三	一一〇	二一三	七二八	五九二	一三二〇
三八、其他ノ有業者	一五・二一	一一・九〇	一四・七七	一三九五	一七一	一五六六	九一六九	一四三七	一〇六〇六
三九、家事使用人	一五・七九	一一・四九	一二・六六	三〇	五八	八八	一九〇	五〇五	六九五
四〇、收入ニ依ル者	九・三六	九・三〇	九・三五	二二	四	二六	二三五	四三	二七八
四一、無職業	一一・二一	八・八一	一〇・三〇	八六四	—	—	—	—	—
總 數	一〇・四〇	九・九一	一〇・二四	二六〇九五	一一二五一	三七三四六	二五〇九六七	一三五七〇	三六四五三七

斯如ク各年ノ死因統計ニ就テ視ルヤ農村住民ノ大多數ノ生業タル農業・林業・養蠶業・漁業・鹽業等ハ其死亡原因トシテ肺結核ニ因ルモノハ各種職業者ニ比シテ最低位ニアルコトハ明カデ、地方村邑ニ於ケル其他ノ各種ノ生業者及其家族ニ於ケル斯種狀態ハ一々之ヲ明確ニスルコトヲ得ナイガ、紡績・綿絲・織物・編物等ノ所謂纖維工業従業者ニ於テハ常ニ各種職業中、最高ノ肺結核死亡率順位ヲ示シテ居テ、而カモ斯ル勞働ノ大部分ガ農村ノ青年女子ニ據テ營マル、コトヲ思ヘ

バ、歸郷職工ノ齎ラス病毒ハ農村結核ノ蔓延ニハ極メテ重大ナル因子ヲナスデアラウ。

七 結 論

前各項ニ於テ述ベタ所ヲ概括シテ結論ニ換エヤウ。

一、我國ニ於ケル結核疫學及ビ豫防ハ從來主トシテ都市中心主義デアッタガ、國土竝ニ國民ノ大多數ヲ占ムル農村ニ關スル各方面ノ結核問題ヲ攻究スルコトハ今後一層重要デアアル。

二、我國大都市ノ結核死亡ハ近年極メテ僅微ナガラ減少ノ傾向ガ見ユルガ農村ニ於ケル此種統計ニハ寧ロ漸増ノ傾向サヘ窺知セラル。

三、全國ニ於ケル農村保健調査ノ成績ヨリ推定スレバ、農村ノ常住人口千ニ付、肺結核患者五・三人其他ノ結核患者一・

〇人ガ存シ、其間ニハ一・六人ノ結核死亡ヲ觀ル。故ニ農村ニ於テハ、結核死亡一ニ對シ現存結核患者四ノ割合ヲ示ス。

即チ一・六ノ死亡數ヨリ患者數ヲ推定スル際ノ推定率トシテ用キテ謬ナイト思フ。(死亡ヨリスル推定率)更ニ農村人口ヨリ患者ヲ推定スルニハ常住人口千ニ對シ六・四ノ割合デアアル。(農村結核患者推定率)

四、農村ニ於ケル結核死亡ノ状態ヲ觀ルト、農村ノ總死亡千ニ對シ肺結核ハ四九・二、腸結核一六・一結核性腦膜炎四・四其他ノ結核四・四ノ割合デアアル。故ニ全結核死亡ハ總死亡千ニ付キ男ハ六七・〇デ女ハ八一・六、平均七四・一デアアル。是等ノ數値ハ地方村邑ニ於ケル結核死亡推定千分比ト觀ルコトガ出來ル。

五、全國農村中ニテ結核病毒ノ蔓延濃厚ト認ムル。農村ニ就テ結核病侵襲ノ原因中、主トシテ其ノ社會的衛生的素因ヲ索ムレバ、斯カル農村ハ經濟生活上或ハ土地ノ實狀等ニヨリ青年子女ノ出稼職工タルモノガ多イカ或ハ純農耕部落ノ漸次ニ商工業化セントスル傾向濃厚デアツテ、次ノ如キ現象ガ著明デアアル。

(イ)村ノ結核罹患率及ビ死亡率ハ全國平均率ニ比シテ極メテ高イ。

(ロ)村ノ女子ノ肺結核死亡ハ男子ノソレニ比シテ異常ニ高イ。

(ハ)結核ニ罹病シ及ビ死亡スル女子ハ生前、女工トシテ工場生活ヲ營メル者ガ多イ。

(六) 純農村ト認ムル村邑ニアツテモ結核死亡ハ各種ノ死亡原因ノ中デ首要位ヲ占メ届出死亡數ノ割ニ現存患者ヲ發見スルコトガ多い。

(七) 工場労働者ノ帶患歸郷ノ原因トシテ結核ハ最主要ナル順位ニアアル。歸郷職工ノ死亡率ノ最高キモ結核デアアル。而シテ歸郷病患工ハ女子ニ多ク主トシテ纖維工業ノ労働ニ従事スルモノデアアル。是等ノ帶患歸郷女工ノ家族ノ健康状態ヨリ觀察スレバ帶患歸郷職工ノ結核ハ明カニ其ノ周圍タル鄉村ニ病毒ヲ傳播セシムル因子デアアル。

(八) 帶患歸郷職工ノ四割八分ハ醫療ヲ受クルコトガ出來ルガ、五割一分ハ醫療ヲ受ケ得ナイ。死亡者デモ其四割ハ醫療ヲ受ケ得ナイ原因ハ貧困ナルコトガ主ナルモノデアラウガ、地方農村ニ於ケル醫療施設分布ノ不均一モ考慮セラレバナラス。

(九) 帝國死因統計ニヨル職業別肺結核死亡ノ數字ヲ觀家スルニ農村ニ於ケル主要生業タル農業・牧畜・狩獵・林業・養蠶業・漁業・鹽業等ノ有業者及ビ其家族ノ結核死亡ハ各種職業有業者及ビ其家族ノ夫レニ比較シテ最低位ニアアル。然レドモ農村ニハ此他ニ凡ユル職業ノ有業者ガアツテ、農村住民ニ結核死亡ガ常ニ尠少デアアルトハ輕々ニ斷言シ得ナイ。殊ニ死亡届出ニヨル病名ニ結核ト明記セラル、コトノ少ナイノハ、農村調査ノ成績ニ徴シテ明カニ推想シ得ル所デアアル。

(十) 本邦ニ於ケル結核豫防上ヨリ農村ノ結核豫防ニ對スル社會衛生的施設ニ就テハ他日ニ讓ルコト、スル。

主要文獻

- 1) 南崎雄七, 農村結核蔓延ニ就テ「人生之幸福」大正十四年七月。 2) 佐藤正, 農村結核ノ疫學「東京醫事新誌」昭和三年四月。 3) 全國各府縣, 農村保健衛生調査實施簡票。 4) 福井, 岐阜, 秋田, 長崎縣, 縣ニテ實施セル保健衛生調査報告。 5) 社會局労働部, 大正十五年労働者募集年報。 6) 鹿児島縣衛生課, 出稼職工歸來者健康狀態調査昭和二年三月。 7) 新潟縣工場課, 縣外工女身體檢査成績大正九年三月。 8) 愛知縣工場課, 歸郷女工ノ死因調査(第一回報告)大正十一年六月。 9) 岐阜縣醫務部, 飛騨國三郡ニ於ケル出稼職工身體診斷成績(第一回)大正十一年九月。 10) 內務省社會局, 歸郷女工ノ健康狀態ニ關スル調査(抄録)昭和三年十二月。 11) 內務省衛生局, 工場ヨリ歸郷シタル者ノ健康狀態調査, 各府縣廻答昭和二年十月。 12) 社會局, 工場監督年報大正十一, 十二, 十三, 十四年。 13) 內務省衛生局年報及內閣帝國死因統計, 各年結核ニ關スル部分。